

研究主題「英語での発信力を伸ばすための指導の工夫

－『英語学習到達マップ』『コンパス』『タスク活動』の活用－」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
東京都立八王子拓真高等学校 教諭 寺田 早紀

第1 研究のねらい

英語の授業において、生徒は聞くこと、読むことに比べ、書くこと、話すことに自信がない様子が見られる。そのため、英語で自己表現する機会を増やすことで、自分の思いや考えを「伝えられた」という達成感をもたせ、英語でのコミュニケーション能力を伸ばしたいと考えた。

平成20年1月の中央教育審議会答申においても、社会や経済の急速なグローバル化に伴い、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための発信力の育成が重要であることが示された。また、同答申では、生徒の実態として、聞くこと、読むことに関しては比較的良好である一方、基本的な語彙や文構造を活用する力や、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身に付いていないことが指摘されている。その原因には、「基本的な文型や文法事項などの指導が理解のレベルにとどまり、その次のコミュニケーション活動、たとえば『書くこと』において実際に活用できる段階までには高められていない」（国立教育政策研究所「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」平成19年4月）ことが考えられる。さらに、同答申では、学年が進むにつれて英語が好きな生徒が減少する傾向も指摘されており、これは、英語の「授業が分からない生徒の割合が他の教科と比べて高い傾向」と関連があると思われる。

そこで本研究では、生徒の英語学習への意欲を喚起し、英語での発信力を伸ばすための具体的な手だてとその活用方法を開発することをねらいとした。

第2 研究の内容と方法

1 研究仮説

発信力を伸ばすための具体的な学習到達目標を設定し、その目標達成に向けて、生徒の「学び」を重視した形成的評価を実施すれば、生徒は「できるようになった」という達成感を感じ、学習意欲を向上させるであろう。さらに、授業の中で文法や語彙を活用する力を身に付けるための活動を行えば、英語での発信力の向上につながるであろう。

2 基礎研究

表1に示す3つの視点について、文献による基礎研究を行い、以下のようにまとめた。

表1 研究の視点と基礎研究のまとめ

研究の視点	基礎研究における考察
学習到達目標の設定	○ 文部科学省 外国語能力向上に関する検討会「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」（平成23年6月） 具体的な学習到達目標を設定し、生徒と教師がその目標を共有することで、英語力の向上及び授業改善につながり、小・中・高の連携も可能になると考えた。
形成的評価の促進	○ 中央教育審議会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成22年3月） 生徒の「学び」を重視し、指導と評価の一体化を図る取組として、形成的評価が有効であると考えた。形成的評価とは、生徒の学習状況を把握し、教師と生徒の双方にフィードバックすることで、教師の授業改善と生徒の学力形成につなげることを目的とした評価である。
文法と言語活動の一体的な指導の充実	○ 「高等学校学習指導要領」（平成21年3月告示） 文法を言語活動と一体的に指導することで、文法を活用する力が高まり、発信力の向上につながると思った。

3 調査研究

表2に示す内容について、生徒及び教員を対象にアンケート調査を行った。

表2 調査内容と結果のまとめ

対象	内容	結果
【生徒】 都立A高等学校 1・2学年生徒 (495名)	英語の学習状況について、以下の項目を四件法で調査した。 ① 授業での到達目標を理解しているか ② 目標達成のための手段を理解しているか ③ 「何が分からないのか」を把握しているか ④ 「何が分かるようになったのか」を振り返っているか ⑤ 高等学校卒業時には、どのような英語力を身に付けていなければならないかを理解しているか ⑥ 英語学習が「好き・得意」か「好きではない・苦手」か	○ 英語学習が「好き・得意」な生徒は、「好きではない・苦手」な生徒よりも、全ての項目について、肯定的な回答がおおむね1.5倍上回った。 ○ 項目⑤の長期的な学習到達目標の理解については、肯定的な回答が他の質問項目よりも全体的に低い傾向にあった。
【教員】 都立高等学校 8校 英語科教員 (60名)	形成的評価について、以下の項目の重要度と実施頻度を調査した。 ① 授業の到達目標を設定し、生徒に理解させること ② 個々の生徒の学習到達度を教師が把握すること ③ 個々の生徒の学習到達度を生徒自身に把握させること ④ 生徒の学習到達度に応じて指導内容や指導方法を改善すること ⑤ 学習評価に基づいた改善内容を、学習支援のために、継続的に生徒にフィードバックすること ⑥ 形成的評価を授業で実施するために必要なもの	○ 全ての項目について、9割以上の教員が重要であると回答した。 ○ 項目④の授業改善については、9割以上の教員が実施している。他方、項目⑤は最も実施頻度が低く、改善の余地がある。 ○ 形成的評価を行うために必要な評価規準表や評価シート、指導事例、授業で評価を行うための時間が十分でない。

生徒への調査結果から、学習到達目標を明確にし、生徒に自分自身の学習過程を自覚させることが、学習意欲と英語力の向上につながる可能性があると考えた。また、卒業時にどのような英語力を身に付けていなければならないかということの理解度が低いことについては、目標とすべき具体的な姿を生徒に明確に示すことで、主体的な学習を支援できると考えた。

教員への調査結果からは、形成的評価を促進するために、学習状況を生徒と教員の双方が短時間で把握でき、それが生徒の学習支援にもつながるような具体的な手だてが必要であることが分かった。

4 開発研究

本研究では、次の3つの手だてを開発し、活用する。

- ① 書くことの学習到達目標を明記した「英語学習到達マップ」
- ② 目標達成の状況を把握し、形成的評価に役立てる「コンパス」
- ③ 語彙や文法を活用し発信力を伸ばす「タスク活動」



「英語学習到達マップ」が示す到達目標を達成するために、「コンパス」で進むべき方向を調整し、トレーニングとして「タスク活動」を行うことで、生徒は学習意欲を高めながら発信力を向上させる（図1）。

(1) 「英語学習到達マップ」(以下、「マップ」と表記。)(表3)

表3 英語学習到達マップ(一部抜粋)

	WRITING			SPEAKING	言語材料	
	主な内容	語数	構成			表現
ステップ7	□読み手や目的に応じて、様々な文章を書くことができる。(事実解説、情報伝達、論説、手紙、日記など) □多様な考え方ができる話題や一般的に関心の高い話題について、自分の考え・意見・提案などを書くことができる。また、立場を決めて意見をまとめ、相手を説得するために意見を述べることができる。(国際政治、社会問題など)	100語程度 ★ 3段落以上	□論点や根拠が明確で、効果的な事例が自分の主張や感想を十分にサポートし、説得力がある。 □文章の目的や種類に応じて、文章構成を書き分けている。	□つなぎ表現や置き換え表現を用いて、文章の結束性を高める。 □書き終えた文章は推敲し、より伝わりやすい文章にする。推敲方法の例) ・時間をあけて読み返す。 ・教師や他の生徒の意見を参考にする。	内容型 タスク 特定の表現に焦点を当てず、話題を重視したタスク活動	□仮定法 □分詞構文 □原形不定詞 □関係代名詞 what □関係代名詞の制限用法と非制限用法

学習指導要領等を参照して、中学校入学から高等学校卒業までの「書くこと」の学習到達目

標を7段階に分けて設定し、それぞれの段階で習得すべき力を CAN-DO リストの形式で示した。「SPEAKING」欄には、タスク活動を作成するための観点を記載した。さらに、小学校の外国語活動の学習内容を明記することで、小・中・高の接続を意識できるようにした。

(2) 「コンパス」(表4)

授業者が準備しやすいよう形式や項目をマップと統一した。生徒と教師が共に目標達成の度合いをすぐに把握できるように、目標の示し方をチェックリスト形式にした。

表4 コンパス(一部抜粋)

単元名 (言語材料:)				配当時間数
ステップ	WRITING			SPEAKING
	内容	語数	構成 表現	
7		<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
6		<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
5				

(3) 「タスク活動」(表5)

生徒の実態や授業展開に合わせて、より柔軟にタスク活動が展開されるよう、「内容型タスク」と「文法型タスク」に分類した。

内容型タスクとは、話題に焦点を当てたタスク活動で、自己紹介や事物説明、手紙などが考えられる。文法型タスクとは、特定の言語材料の習得を目的としたタスク活動で、関係代名詞の活用や、時制を比較する活動などが考えられる。本研究では、表5が示す四つのタスク活動について、コンパスの一例や、活動形態及びヒントの出し方で難易度を調整する工夫を記載した事例集を作成した。

表5 タスク活動事例集の概要

種類	ステップ	ねらいと内容
内容型タスク	自己紹介 ステップ1 (中学1年生)	オリジナルの動物を考え、発表することで、自己紹介の基本表現を身に付ける。
	旅行記 ステップ6 (高校2,3年生)	修学旅行のポスター作成を通して、話し合いの中で結論をまとめたり、絵や図を用いて書いたりできるようになる。
文法型タスク	現在形と過去形 ステップ2 (中学2年生)	現在の習慣や人物の性格等は現在形を、過去の出来事は過去形を活用できるようになる。
	動名詞と不定詞 ステップ4 (高校1年生)	趣味は動名詞を、希望は不定詞を用いることで、それぞれのもつ意味の違いに気付く。

英語学習到達マップ、コンパス及びタスク活動の活用手順については、表6に示した手順を参照する。

表6 マップ、コンパス及びタスク活動の活用手順

① 該当科目の年間指導計画を立てる。
② 教科書の内容や習得を目標とする文法項目に合わせて、タスク活動を作成し、年間指導計画に位置付ける。
③ マップの目標に合わせて単元ごとのコンパスを作成し、授業で生徒に到達目標を示す。
④ コンパスを授業で活用し、生徒の達成度を把握する。生徒の学習状況に合わせて、授業の「計画・実施・評価・改善」というPDCAサイクルを日常的に機能させる。
⑤ 年間を通してマップを確認し、生徒が今のステップにいて何を勉強しているのか、高校卒業時には何ができようになっているのかを折に触れて確認する。

5 検証授業

表7 検証授業の概要

対象	授業回数	学習内容・学習活動	ねらい
1年次 14名	全2回	「現在形と過去形」 書く活動→話す活動	好みや現在の習慣は現在形を、過去の出来事は過去形を用いることで、時制の違いを理解し、使い分けられるようになる。
2年次 14名	全3回	「動名詞と不定詞」 書く活動→話す活動 →書き直す活動	国際会議という場面設定の下で、自分の趣味や興味のあることは動名詞を、これからやってみたいことは不定詞を用いることで、動名詞には既に行った動作、不定詞にはこれから行う動作のイメージが内包されていることに気付く。

(1) マップとコンパスの検証と考察 - 学習意欲の向上 -

検証授業(表7)においてマップとコンパスを活用したところ、生徒の学習過程の自己把握の状況に改善が見られた(表8)。マップで長期的な到達目標を確認し、コンパスでは短期的な目標とその達成状況を振り返ることで、生徒は自分自身の学習過程を自覚できるようになったと思われる。さらに、7割の生徒がコンパスの活用が学習意欲の向上につながったと回答している。アンケートの自由意見では、「コンパスがあるとどのようなことを学ぶのか分かりやすく良い」との感想が見られた。学習到達目標を理解し、その達成度を自覚することが学習意欲の改善につながると考える。

他方、表8の項目(5)が示す長期的な目標の理解について表8は検証授業前後の学習状況の変化が半数にしか満たなかった。その理由として、検証授業の時間内でマップを見る時間を十分に確保できなかったことが考えられる。年間を通してマップを活用し、折に触れて学習到達目標を確認する必要がある。

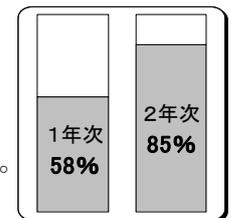
(2) タスク活動の検証と考察 - 発信力の向上 -

1年次のタスク活動では、85%の生徒が書く活動で時制を適切に使い分けられていた。しかし、話す活動では、活動内容を理解できずに戸惑う生徒が多く、到達目標を十分に達成できなかった。原因としては、タスク活動が複雑すぎたため、活動内容を理解することに時間がかかり、「時制の違いを理解し、活用する」という本来の目標が不明確になったことが考えられる。

2年次のタスク活動では、一度書いた英作文を書き直す活動を行った。マップに示された観点に沿って文章を書き直した結果、置き換え表現は平均 1.8 語、つなぎ表現は平均 2.3 語増加し、書き直す前の文章と比べてまとまりのある文章になった。さらに、新しい情報を付け加えたり、関連する内容を結び付けて情報を並べ替えたりすることで、より読み手を意識した文章となった。総語数の平均値は 44.5 語から 59.5 語に増加した。語数増加により、生徒は書く活動に対して自信を得た様子が見受けられた。授業での活動を通して、生徒はまとまりのある文章に必要な観点や、適切に読み手に伝えるための観点到気付き、書く力の改善につながったと考えられる。英語の作文は日本語の作文とは文章構成が異なるため評価観点も変わる。あらかじめ英作文の評価観点を示し、指導することで、生徒の書く力は伸びるという実感を得た。

タスク活動終了後に、書くこと、話すことの表現活動にもっと取り組みたいと思うかについて調査したところ、図2のような結果が得られた。2年次で肯定的な回答が多い理由として、書き直し活動を通して「できた」という実感をもてたことが考えられる。生徒に達成感をもたせられるように、クラスの実態や授業展開に合わせて柔軟にタスク活動を工夫する必要があることが分かった。

図2 授業でもっと表現活動に取り組みたいと思う



第3 研究の成果

(1) 生徒の学習意欲を喚起し、発信力を伸ばすための具体的な手だてとして、マップ、コンパス、タスク活動は有効であること。マップとコンパスを活用することで、生徒は自分自身の学習過程を自覚するようになり、学習意欲の向上につながった。

(2) タスク活動を通して、書く力にも改善が見られたこと。

第4 今後の課題

- マップ、コンパス、タスク活動を長期的に授業に取り入れ、生徒の学習意欲及び発信力の更なる向上を図る。
- タスク活動の量的・質的な充実を図り、マップは教科書との具体的な関連を示す。
- 聞くこと、読むことのマップを作成し、四つの領域を統合した発信力を育成する。